公開対談シリーズ第８回

NINAGAWA 千の目

寺島しのぶ × 蜷川幸雄

４月に開催された第８回に登場したのは、結婚式をごく間近に控えていた時の人、女優・寺島しのぶさん。デビュー時から寺島さんをみつめてきた蜷川幸雄と、「蜷川さんにダメ出ししてほしい！」と信頼を寄せる寺島さんのトークは温かい雰囲気の、しかし演劇人同士の火花の散る語り合いの場となった。

エネルギーを貯めてないと寺島さんとは四つに組めない。片手間とか掛け持ちでは手に負えない人です。（蜷川幸雄）

寺島しのぶという女優

蜷川（以降N）　寺島さんとは彼女が若い時から仕事をしていましたが、最近は一緒に仕事はしていません。なぜかというと僕に対する態度が悪いんです。（笑）僕は仕事を一緒にしていて、いやな感じを持っていないと思っているんですが、観に来ないのです。それは、「ふん！」という感じですが、それってどう。

寺島（以降T）　いや反発ですよ。私が文学座をやめて初めて呼んでいただいた方が蜷川さんで、その後は蜷川さんにずっと挑戦をしてきたんですが、ある日突然使われなくなって、「じゃ、こっちも観なくていいかなあ、と」そんな感じです。

N　この態度の悪さと率直さというのは、寺島さん固有のものです。もちろん演劇的な教養もあり、お父さんは尾上菊五郎、お母さんは富司純子（すみこ）、弟さんは尾上菊之助君で、演劇的な教養というか血の流れは間違いなくあります。だから、ほっておいても演劇の匂い、映画の匂いに充満している家庭で演劇的には知らないことはないので、そういう理屈をこねないけれど、しかし大事にのんびり奔放に育てられたので、思ったことを何でも口で言ってしまいます。寺島さんは夜でも電話を掛けてきて、「あそこの所が気にくわない」、「○○がああ言ったが、あれでいいのだろうか。私はこうしたい」とかでうるさいわけです。その重荷に耐えかねる日も僕だってあるわけですが、いい女優だということはもちろん分かっています。

T　『血の婚礼』（蜷川幸雄演出・1993年）、以来ですね。私の文学座での卒業公演が清水邦夫さんでした。卒業公演を、たまたま清水さんが観に来てくださった時に、蜷川さんに電話をしてくださいました。そのタイトルが初めは『ひばり』だったのが『血の婚礼』に変わりました。私が19歳の時です。

N　もう少し丁寧に話しますと、僕は、清水邦夫と『ひばり』という芝居をやろうと思ったんです。今年２月に『ひばり』の芝居をやったので、きっと心の底では腹を立てていることでしょう。それで、その『ひばり』ができなくて、『血の婚礼』という芝居をしました。

「寺島しのぶというのがいて、すごくいいんだよ。でも男の子だか、女の子だか分からないんだよ」と紹介され、清水が言うのならいいかなあと思って出てもらったが、それはとてもよかったし、それ以来の知り合いです。

その後にも『グリークス』という９時間連続してやるギリシャ悲劇をやりました。そこでは、弟の菊之助君と二人で姉弟の役をやってもらいましたが、これもとても良かったです。その後には『欲望という名の電車』、『テンペスト』、『近松心中物語』もやっていますが、ここの所はちょっと仕事がたまたま離れたんです。

僕は、売れている時の女優とはつき合わない。売れている時は僕を必要としていないんです。

T　そんなことはないです。

N　姉弟でやるとものすごくいいです。エレクトラは、オレステスとの姉弟の芝居ですが、二人が本当にものすごくよかったです。

歌舞伎は本当に不思議だと思うのですが、二人がもつれ合うように、近親相姦のように仲のいい姉弟で、仇討ちも一緒にやろうとしている役でした。もつれ合うシーンはまるでベットシーンのように二人で演技をやるんです。僕はそっと「ねえ、恥ずかしくないの」と聞いたら、「何で」と二人ともに言われました。菊之助君からは「だって、父ともラブシーンをやりますから」と言われ、「ああ、そうか」と思いました。

T　弟の方がその点は全然慣れていますよ。私は弟よりちょっとドキドキしていました。

N　これが不思議で、違う生物を見ているような気がしました。歌舞伎という国があって、そこで生きている人間は、ちょっと違うのかもしれないと思ったんです。それは本当に一回目、二回目の稽古から完璧な仕上がりになるくらい素晴らしかったです。

再び二人で何かをやる時が来た

T　私は蜷川さんとは『欲望という名の電車』が最後なんです。その時に蜷川さんに「俺、女優の前で胃薬を飲んだのは久しぶりだよ」と言われました。そのぐらい過酷な稽古だったんですよ。本当に理不尽なぐらい怒られましたが、初日が開いて「当分、お前とはいいなあ」と言われました。

N　いい俳優がいい人間であるとは限らないし、いい人間がいい俳優であるとは限らないし、両方悪いのもいます。そういう狭間にいちいちこのうるさい女がつき合うから、ぶれるのです。そうすると「俺の言うことだけ聞いていればいいだろう」と言いたくなるが、しかしそう言ってはいけないタイプなので、「だから、そこはさ……」と僕は我慢しているので胃が痛くなるわけです。自分が悪いんだよ。

T　（手を打つ）

N　この態度ですよ。（笑）寺島さんとは、いい条件を整えながらもう一度出会いたいと実は思っています。ほっておく手はないし、間もなくだと思うし、今は寺島さんは性的奔放というか、表現が性に帰着するような所で生きているではないですか。それを離れなくてはならない時が間もなく来るでしょう。

だからその時に、「よし、何にしょうかなあ？」と本当に考えているよ。

T　私は『唐版　滝の白糸』とかやりたいですね。私は、母がやっている場合ではないなあと思いました。

N　それは、半分正しいよ。

T　そっちで蜷川さんとご一緒させていただけるのであれば、そこからまた立ち返りたいという感じがします。『下谷万年町物語』とか。

N　これは両方とも唐十郎の作品なんです。『下谷万年町物語』というのは100人近いオカマが出てきて、終戦直後の混乱する日本の中で、オカマの集団や下町の青年たち、松竹歌劇のヒロインたちの女性が出てきます。もう一つの『唐版　滝の白糸』はお母さんである富司純子さんがやりましたが、自分の腕を切り、ホースの代わりに血管とつないで、血の水芸をやるという、激しい女の役をやりたいと言っているんです。この思考で分かるように古典劇や生半可なものより、激しく自分の根底を揺り動かすものを寺島さんはやりたいんだと思うが、それは悪くないなあ。

うるさい関係の幸福

T　今日は蜷川さんに是非に紹介したくて、私の旦那様が来ているんですよ。蜷川さんとやっていた頃の私を知らないから観てほしいんです。彼は演劇なども大好きなので、そういうすごいビジュアルの蜷川さんの劇を観てもらいたくて。でも他の人のは観てほしくないんです。私が出ている蜷川さんのを観てもらいたいんです。でも『唐版　滝の白糸』って良くないですか。

N　いいかもね。ちょっと観たいですね。（会場拍手）

『唐版　滝の白糸』の一番初めは、ゴーストタウンに長屋があって、そこに運送屋がタンスを運び長屋の空き地に置くんです。そうするとタンスの扉が「ギー」と開いて、タンスの中から主人公が出てきて、洋服ダンスの上にパッと乗ります。その主人公は、夜の商売をしているようなホステスとか、そういう感じの女の人が出てくるんですが、そのようなビジュアルからいってもそれは確かにぴったりだね。

唐十郎とか日本でいえば前衛的な劇作家の戯曲って好きなの。

T　大好きです。だから『血の婚礼』も大好きです。そういう理屈でない、その熱でワーと盛り上げられるものというのは、演劇の醍醐味のような気がします。そこは映像でも出来ない。何かそのダイナミックさでは、すごくリアルではないですか。映像の世界を舞台に持ってきたり、舞台の人が映像をやったり、最近では「東京タワー」もそうですが、同じものを舞台やテレビでやったりしています。そうではなくて舞台でしか出来ないもの、映像でしか出来ないものがある気がします。そういう意味では、蜷川さんの舞台は、やはり舞台でしか出来ないもので、絶対やりたいですね。

寺島しのぶ（てらじま　しのぶ）
1972年生まれ、京都市出身。父は尾上菊五郎、母は富司純子、弟は尾上菊之助という、演劇・俳優一家に生まれ、大学在学中より、テレビドラマ、舞台、映画などで活躍。演劇では、昨年の『書く女』で第６回朝日舞台芸術賞【舞台芸術賞】、第14回読売演劇大賞【最優秀女優賞】（第11回に続き２回目）をダブル受賞した。また、映画では「赤目四十八瀧心中未遂」で2004年に第27回日本アカデミー賞【最優秀主演女優賞】、第46回ブルーリボン賞【主演女優賞】などの主要な映画賞を総なめにするなど、日本を代表する実力派女優。今年１月には主演映画「愛の流刑地」が公開、２月には行定勲演出の舞台「FOOL FOR LOVE」に出演、大きな話題を呼んだ。彩の国シェイクスピア・シリーズでは第６弾「テンペスト」に出演した。

photo:幸田 森　構成: 横山雅美